

高田衛 ◆ 監修

服部仁・佐藤至子 ◆ 編 校 訂

じろろろ

児雷也 豪傑譚

いろいろなものがたり

全二巻



【監修者のことば】
口上

高田衛 (東京都立大学名誉教授)

『児雷也豪傑譚』は天保十年（一八三九）起筆、慶応四年（一八六八）未完結のまま終刊という、三十年がかりの幕末合巻（草双紙）であって、美図垣笑顔、一筆庵主人、柳下亭種員、柳水亭種清という四人の作者のリレー執筆によって、歌川国貞、同国輝、二世国貞、歌川国芳ら七人の絵師がかかわった、江戸和泉屋市兵衛による刊行で、今ではこの全四十三編を洩らさず通読することは至難な稀観の大伝奇小説である。われわれは先に佐藤至子という稀代の研究者を擁して、同時期の大作長編草双紙『白縫譚』の、長大かつ美術的な全翻刻、全挿絵収容という出版刊行を敢行したが、すでにご存知のごとく、大きな評価を得た。そしてだちに要望されたのが、この『児雷也豪傑譚』全編の全挿絵、全翻字と解題であった。

この草双紙の刊行時は、英・露・仏・米らの黒船が、舷に大砲を並べて日本列島の各地に出現して、開国を要求し、国内的には薩長をはじめとする倒幕運動が激化して、日本の各地が明日のみずからの姿を読めないという転換期であって、その意味では現在によく似ている。江戸出版界では滝沢馬琴（八十二歳）の死去（一八四八）もあって、新しい戯作者も出ず、作者不在状態で、前時代旧版の版木をやたらべたと再摺発行、海賊版の多い時代となった。その間の、江戸と明治をつなぎ続けたかすかな系が、一に『白縫譚』、二に『児雷也豪傑譚』、いずれも知識人というよりはは大衆読者に支えられた草双紙、物語の奔放かつ壮大な変動と挿絵の魅惑美であったのである。今回は戯作研究のベテラン、服部仁のバックアップも得て、作業を応援していただいた。

【編・校訂者のことば】

新しい『児雷也豪傑譚』の
刊行にあたって

服部 仁 (同朋大学教授)

佐藤至子 (日本大学教授)

『児雷也豪傑譚』は児雷也こと尾形周馬弘行を主人公とする冒險活劇である。合巻と呼ばれる挿絵入りの小説として、天保十年（一八三九）に初編が刊行され、慶応四年（一八六八）刊行の四十三編まで続いた。四十三編にしてなお未完だが、約三十年の長きにわたり読者に愛され続けたことは瞠目すべき事実である。

刊行中の嘉永五年（一八五二）に早くも歌舞伎化され、『児雷也豪傑譚話』



江戸期合巻の最高峰が
ついによみがえる！

(河竹黙阿弥作)として上演された。当時の人気的一端がうかがわれる。この歌舞伎は一九七五年に国立劇場で復活上演され、最近では二〇〇五年に新橋演舞場で上演された。尾上菊之助の児雷也、尾上松緑の大蛇丸、市川亀治郎(現・四代目市川猿之助)の綱手をご記憶のかたも多いことだろう。

児雷也・大蛇丸・綱手は、それぞれ蝦蟇がま・大蛇・蛭螭なめくじに守られた超人的なキャラクターであり、児雷也が蝦蟇の妖術を使う場面は見どころのひとつである。この三人の関係は「蝦蟇は蛭螭に勝ち、大蛇は蝦蟇に勝ち、蛭螭は大蛇に勝つ」という三すくみの考え方を背景に形づくられている。すなわち、児雷也と大蛇丸は敵同士となって闘い、児雷也が窮地に陥ると綱手が現れて大蛇丸を退け、児雷也を助ける。児雷也は美貌の正義漢、大蛇丸は好色な悪人、綱手は心清き美女という描き分けがはっきりしていて、長編でありながら、わかりやすさが保たれている。

『児雷也豪傑譚』に取材した浮世絵も数多く現存している。二〇一四年に太田記念美術館で開催された『江戸妖怪大図鑑』展の第三部「妖術使い」では、蝦蟇に乗る児雷也や蛭螭に乗る綱手の絵が一堂に会し、圧巻であった。小説から歌舞伎へ、浮世絵へと、媒体を超えて広がった幕末の「児雷也」人気がしのばれる。

このように『児雷也豪傑譚』から派生した歌舞伎や浮世絵は、現代でも多くの観客を集めているのだが、原作のほうはといえば、活字翻刻として流布しているのは明治三十一年刊行の続帝国文庫『児雷也豪傑譚』でもはや手に入りにくいものである上、この続帝国文庫本には四十二編と四十三編の翻刻が収められていないという欠点があった(その代わりに「大団円」と銘打つ『児雷也豪傑譚拾遺』

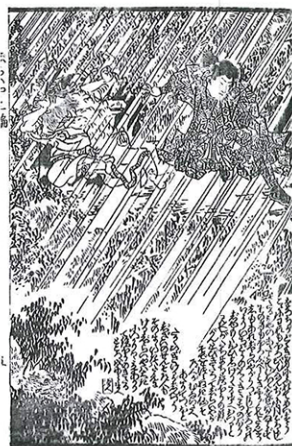
を付け加えて物語の完結をはかっている)。こうした状況にかんがみ、このたび新たに初編から四十三編までの活字翻刻を作り、全編の挿絵とともに読者の皆様へお届けする運びとなった。多くの方が、この美しく心躍る物語にふれてくださることを切に願う。

児雷也(蝦蟇)・
大蛇丸(蛇)・
綱手(蛭螭)の
三すくみの戦い





(4ウ5オ)



(5ウ6オ)



り。児雷也は手早く下をこめ替へて、再び大蛇の左りの眼を望みて撃ち込みしかば、初めの痛手の苦しみにまたざる眼を撃ち抜かれ、のたうち廻りて苦しみけるが、大木を倒すがごとく凄まじき音の山へ谷に響きて、そのまゝに死したりけり。

児雷也はくそつき、鉄砲引き提げて道を伝へて上りつゝ、かの大蛇窟に近づけば、蜃蜃はそのまゝ、形を變じ、仙素道人の姿を現し、大息ついで氣も絶え、児雷也は道人のかたへにうつくまりて両手をつかへ、「師の危急を救ひ奉り、いさゝか日頃の仇を取りひしき候ひき」と候んで申しける時、仙素道人、苦しき息づかひにて、「汝、師弟の道を忘れず、さしに猛き大蛇を退治せし英勇、最も感ずるに、大蛇が毒氣身に触れて、命数こゝにわれも滅ぶべし」と教訓したる折しもあれ、児雷也が撃つたりし大蛇の口より一道の白氣立ち上り、樹木生ひ茂りたる中へ落つると見へしが、たちまち鉄砲の鉄丸飛び来たつて児雷也が袖を貫き、仙素道人が胸板へ当たりて筒音高く響きけるが、神通自在の仙素道人もそのまゝ、息は絶えにける。児雷也は大きに怒りつゝ、立上がりて、鉄砲の来たところを睨まへ。

(5ウ6オ) 走り下らんとする時、天にはかにかき曇り、山鳴り動きて大雨車軸を流し、風荒く吹き来たりて樹木を鳴らし、見る／＼仙素道人が姿は霧に見へずなりき。此時尾上を隔ちつゝ、一つの狼、鋭き眼を見張りてゐたりしが、児雷也が鉄砲引き提げて

谷へ下るを見て、熊笹の茂みへたちまち入りたりける。

それはさておき、夜刃五郎は戸隠山より妙香山へ入しと聞き、「子細ぞあらん」と鉄砲引提げ、これも同じく山深く入りたりしに、案に違はず、児雷也はるか尾上に異人と入物語してゐた。かたへに大きな大蛇の血を吐きて死したるは、先刻山へ中震動せし時に児雷也が撃ちしならんと舌を巻きて、児雷也が鉄砲に妙を得たるを感嘆してぞあたりける。時にかの大蛇が吐いたる白氣、夜刃五郎が身に当たるとひとしく、身内ぞつとしてけるが、夜刃五郎、児雷也に日頃痛服せし心、たちまち悪心起り、「われ日頃児雷也が勇氣に恐れ、かつ剣術の不思議によつて痛服すといへども、勇力はかれと等しくして恐るゝに足らず。たゞかの術に及ばぬのみなり。今日の当たり見たる異人こそ、児雷也幻術を習ひ得たる道人ならめ。まづ彼奴めを鉄砲にて撃ち殺し、後、児雷也を討ち取らん」と狙ひを固めて打たりしは、全く夜刃五郎が身の内へ大蛇の執念分け入て、仙素道人を撃ち殺せしなり。

夜刃五郎は仙素道人を撃ち殺し、心中大に喜び、なほ児雷也が山を下るを待ちて討ち取らんと、熊笹の茂りし間に忍びいる。児雷也はまた、鉄砲の筒音せしは確かにこゝろにうなづき、まづ心見んとて玉をばこめず、鉄砲を一むら茂りし熊笹の中へ撃ち込んだり。夜刃五郎は不意を打たれて大に驚き、児雷也が撃つたりし鉄砲の音と共に、熊笹の陰より現れ出て、やり過こして児

望外の喜びである。

京極夏彦 小説家／意匠家

現代のエンタテインメント・コンテンツを構成する要素の殆どは、江戸期に出揃っていたといえるのではないだろうか。我々が楽しんでるものごと、面白いと感じるものごとの原型は、悉く江戸期の娯楽作品に見て取ることができる。草双紙などは、いわばクールジャパンと呼ばれるコンテンツ群のルーツといっても良いと思う。ただ、芸能などは残ったが、小説は棄てられてしまった。近代化の名の下に、その多くが無価値として切り捨てられてしまったのである。これは大変な損失だと考える。国際的に評価されつつあるソフートの原点が無視されている状況というのは宜しくないと、常々感じていたものである。面白さの根幹を成す概念は、百年以上前に示されていたのだから。

その、江戸の草双紙の集大成にして最終形態である合巻もまた、明治期には減ってしまう。その草双紙の掉尾を飾るのが『見雷也豪傑譚』である。折りしも激変する時代に直面した本作は、様々な局面に応じて手を変え品を替え、作者まで変えてプレゼンテーションし続けた大部の快作である。恰も江戸の娯楽のあれこれを総動員したという感である。その所為か未完と雖も絶大な人気を誇った。後の世で持て囃される本邦の「ヒーロー」像を先取りしたような見雷也の冒険物語から、学ぶところは大きい。いや、それ以前に、面白い。

不完全な『続帝国文庫』版以外、翻刻がなかった本作が完全な形で世に出されることは望外の喜びである。『白縫譚』と併せ座右に置いて然るべき作品だと思う。

本書の特色

- ◆『見雷也豪傑譚』には改修版・改刻版が存在するが、本書では底本として初版本を用い、かつ可能な限り早い摺りのものを使用するよう努めた。
- ◆読みやすさをはかるため、原文には適宜漢字をあて、また句読点・段落等を新たに施した。
- ◆表紙・見返し・白絵・本文・奥目録は、全丁をあますところなく影印で収録した。
- ◆色彩の美しい表紙、および発売当時に原本が収められていた袋は特にカラー口絵としても掲載した。
- ◆作品理解を深めてもらうべく、登場人物一覧表を各巻に付した。
- ◆活字翻刻は明治期に刊行された続帝国文庫収録のものが流布していたが、現在では続帝国文庫の原本も入手にくい状態であることに鑑み、ここに併せて新組で復刻した。

両の手に桃と桜や草の餅

延広真治 東京大学名誉教授

佐藤至子氏の影印翻刻による『白縫譚』の刊行より九年が過ぎた。この間つねに願い続けたのは『見雷也豪傑譚』の上梓であった。何しろ安政三年（一八五六）版の番付「東都合巻競」（郡立中央図書館所蔵）では西の大関「白縫譚」に対して東の大関を占めるのが本作だからである。

天保十年（一八三九）より慶応四年（一八六八）の間に四十三篇まで上木しながら未完にとどまり、明治三十一年刊行の『続帝国文庫』に「大団団」が付されて漸く完結した。つまり木版摺に始まって活版印刷に終ったこととなる。作者五人、画工七人の競作ぶりも大きな楽しみであるが、それだけに激変する時代に真正面から向き合わざるを得なかった。題名を変えたり、登場人物の顔を改めるなどしながらも刊行し続けた版元の奮闘ぶりには頭が下るが、それも一重に本作に魅せられたからに相違あるまい。

今回の上梓により思い適って東西の両大関を座右に置けることになった。この幸せをもたらして下さった佐藤至子・服部仁両氏の労苦に深甚の謝意を表したい。

両の手に桃と桜や草の餅 芭蕉



高田・鶴田

好評評判

白縫譚 全三巻

高田 衛二監修 佐藤至子二編・校訂

美貌の妖艷・若菜姫の活躍を壮大なスケールで描いた 全九十編
にもおよぶ合巻中の最大にして最高の傑作長編

定価：本体八八、〇〇〇円＋税

申込書 この本文書で読者の書店へお申込み下さい。

見雷也豪傑譚【全2巻】を 御申込みます。
(国書刊行会刊)

お名前

〒

ご住所

電話

ファクシミリ

メールアドレス

【造本・体裁】

菊判(222×152ミリ)、上製布クロス装、
美麗貼函入・セット函入
本文特濃上質紙使用、上巻680頁・下巻640頁
本文12級2段組
装訂＝山田英春

定価：本体58,000円＋税 分売不可
ISBN978-4-336-05923-9 C0093

2015年6月刊行

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
Tel.03-5970-7421 Fax.03-5970-7427
URL: http://www.kokusho.co.jp
e-mail: sales@kokusho.co.jp